

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Voice研究 <卒論要旨>
Author(s)	原野, 昇
Citation	広大言語 , 5 : 65 - 66
Issue Date	1965-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046235
Right	
Relation	



語 順

現代口語文法

Vorlesungen Über Syntax II

毛利 可 信

原 沢 正 喜

J. Wackernagel

英文法シリーズ(23)

現代英文法講座
(研究社) (7)

Birkhäuser
(Basel)

(文責 本人)

voice 研 究

原 野 昇

Paul killed John. と John was killed by Paul. とは少くとも客観的
的事実については同じことを表わしている。それ故、言語が伝達の機能を最大限度に果すために
は、これらのうちのどちらか一方の言い方があれば足りるはずである。それにもかからず、
今日の多くの言語には能動・受動の両方の表現方法があるのは何故だろうか、というようなこ
とから“voice” (相)とは何か、それはどのような文法的範疇をなしているのだろうかを
みようとすした。

まず今日の英語の受動相を中心に、その様々な使用について全部を受動相と呼んでよいかど
うか、よいとすれば何を基準にしてそう言えるか、また同じ受動相内における意味・用法その
他の差はどこに存するのかを検討し、次に受動相の発生などを歴史的あるいは二三の言語を
比較対照し、「相」というものの何たるかを見ようとすした。

ひき出された結論は多分に抽象的かつ主観的で、その方法とともに再考の余地はあるが、
「相」というもの自身が大いに主観的なものであるということは言えると思う。それは受動相
存在の大きな理由の一つでもあるが、話者が動作を受けたものの方により多くの関心をよせ、
またその方向性のある動作の方により多くの注意を向けている場合に受動相が用いられ、それ
は個人によって異なる主観的なものであるからである。それが Someone killed John
F. Kennedy とともに、かつまた John F. Kennedy died. とともに、John F.
Kennedy was killed. という表現が存在する大きな理由である。

参 考 書

L. Bloomfield : Language

1. O. Curme: Syntax
 " : Parts of Speech and Accidence
 2. C. Frees: The Structure of English
 " : American English Grammar
 3. Jespersen: The Philosophy of Grammar
 " : A Modern English Grammar III, IV
 4. Kruisinga: A Handbook of Present-day English II
 5. Meillet: Linguistique historique et linguistique générale
 I
 6. T. Ohiou: An Advanced English Syntax
 7. Foutsma: A Grammar of Late Modern English II
 8. Sapir: Language (泉井久之助訳「言語」)
 9. Wackernagel: Vorlesung über Syntax I
 中島文雄: 文法の原理 (研究社)
 岡村 弘: 国語英語の研究 (研究社)
 福村虎治郎: 時制と感 (英文法シリーズ)
 高津春繁: ギリシア語文法 (岩波書店)
 呉 成一: ラテン語入門 (岩波全書)
 泉井久之助: ラテン広文典 (白水社)

etc.

(文責 本人)